

風の末裔シリーズ・1stシーズンの6

～金銀砂子～



朝靄の草原に夏草が波打っている。

なんて広い、真つ直ぐな大地……！

イルアルティは、風に乗って愛馬と共に、飛ぶように駆けていた。

「気持ちいい……！」

昨日この草原を通りかかった時、思いきり走ってみたい衝動にかられたけれど、族長達と一緒にだったので、我慢した。

朝の凜とした空気の中、馬の脚も軽く、空まで駆けて行けそうだ。やっぱりこっそり宿を抜け出して来てよかった！

ふいに後ろから別の馬の息づかいが聞こえた。イルの馬の斜め後ろにびったりくっ付いている。いつの間……？

ちらと振り向くと、青鹿毛の艶やかな馬に、乗っているのは、イルと同年代の子供のようだ。兜を深く被っていて、顔は見えない。

「イルを女だと思っただからかうつもりね。よおし……！」

手綱を奮って馬に激を飛ばす。

「いっ……！」

気持ちの良い風がイルと尾花栗毛の愛馬を包む。これで部落のどんな名馬も大人もぶっちぎれたのだった。

つかし……

背後にシュン！ と風を感じたと思ったら、青鹿毛の馬は、

イルを一步で抜き去った。追い抜き際に、兜の下の口が少し上がって笑っているのが、スローモーションのように見えた。

あつと言つ間に小さくなる青鹿毛を、イルは茫然と眺めていた。生まれて……初めて……負けた……。

「やっぱり王都ともなると、凄い人がいるんだわ」

イルは馬を返して、地平に広がる、王宮を擁した巨大な都に向けた。

今日の午後には、噂に名高いモンゴルの大王が、大陸より凱旋する。明日から祝賀の催事が開かれるのだが、その一つの競馬大会に、イルは地元の代表として招かれた。

父親はびくくりして遠慮したが、族長が大乗り気で、都への送迎を申し出てくれた。その地方の競馬大会で二年連続ぶつちぎり優勝しているイルを、彼はたいそう自慢だったのだ。

「イルアルティ、何処に行っていたのかね？」

族長はたっぷりした髭を撫でながら、宿の前で、他の地方の長と、井戸端会議をしていた。

「ほお、その子供ですか？ お宅のご自慢の神童というのは」
何人かのニヤニヤした視線が嫌で、イルはお辞儀だけして、

馬を引いて足早に通りの過ぎた。

「あの子は内気だね。しかしひとたび馬に跨がったら、都と言えども、その辺の騎手では齒が立ちませんぞ！」

族長の自慢気な声を背後に既に向かう。

…今しがた『その辺の騎手』に負けて来た所なんだけれど……
都には、きつとあんな騎手がゴロゴロいるんだわ。あーあ、
なんだかもう、逃げ出したくなって来た。

都に来るのはワクワクだったけれど、いざ来てみると、思っていたほど楽しくもない。賑やか過ぎて目がチカチカするし、みんな早口で何言ってるか分かんないし、大王だつてきつとせわしなくて怖い人に違いない。

イルは、額を押し付ける愛馬の首を、ポンポン叩きながら呟いた。

「明後日(あさつて)は適当に走って、とつととおうちに帰ろうね」

青鹿毛は草原を抜けて、王都より西の森に向かって駆けていた。

この森は『鎮守の森』で、付近の住民の立ち入りは禁じられている。しかし彼はお構いなしに、慣れた感じで踏み跡をたどり、木々の間を分け入った。

枝を兜で防ぎながら、森の中心の、小さなパオのある広場にたどり着く。朝霧の中に、草の馬が、馬装を解かれたばかりな感じで休んでいた。

少し離れた所に、蒼い髪を長く編んだ女性が立っている。今まさに、舞い降りて来た鷹を、腕に迎えている所だった。

女性の背中には、見えるか見えないかの色で、細い羽根が揺れている。

「蒼の狼！」

少年は馬から飛び降り、駆け寄りながら兜を脱いだ。豊かな真っ赤な髪が、フワサと肩に降りる。

「トルイ様……」

狼と呼ばれるには線の細すぎる女性は、鷹の手紙から目を上げて、少年を見た。

「あなたは一足先に帰っていると思ったんだ」

「そう……王がご帰還なさるのに、お城を抜け出すなんて……」

女性は咎める言葉を口にしながらも、微笑みを湛えていた。
「風までに城に帰ればいいんだ。あいつら、俺がいない事なんて、気にも止めないさ」

少年はスタスタと、蒼の狼の正面に歩いて来た。

……また少し、背が伸びたようだ……。



「トルイ様？」

少年は触れる程の側まで来て、薄い銀色の目で彼女を見上げ、八重歯というには大き過ぎる犬歯を見せて、ににっと笑った。

「お・か・え・り・なさい！」

「……………」

「王は百万の大歓声に迎えられるのに、あなたは一人じゃん」
蒼の狼は色んな衝動に駆られたが、…飲み込んだ。

「そう…慣れているのだけだね…」

「俺と一緒にいるようになったら、あなたを一人にしないよ。
あくあ、早く連れてってくんないかなあ。兄上達はもう將軍になつて、城を守っているっていうのに！」

少年は、外されたばかりの武装をキラキラした目で眺めながら、いつもより饒舌に喋る。

「…なんだか今日は、こ機嫌が良さそうですね」

「うん、面白い奴に会った」

「どんな方です？」

「俺と同じように、人間なのに、風を使う奴！」

「俺が本気を出さなきゃ、置いていかれる所だった。同じくらしいの年でさ、しかも女の子だけ。いるんだね、あんな奴。濃い

飴色の肌をしていたから、南方系かな？ 多分、競馬大会に出場して、地方から来たんだらうな」

ふと見ると、人に質問しておいて、蒼の狼は先程の手紙を凝視している。

「ちえ…」

しかしすぐ手紙から視線を移して、女性は赤毛の皇子を見た。

「トルイ様」

「何？」

「明後日の競馬大会、貴方も出場して下さい」

「は？？」

「そして、王から手渡される優勝杯を、貴方が拝領して下さい」

…しばし沈黙の後…

「…俺なんかが、そんな事やらかしたら、シラケるぜ…」

「…そう…ごめんなさい…」

しまった、この子の気持ちも考えないで、浅はかな事を口走ってしまった。

トルイは少し考えてから言った。

「そいつと親父を会わせたくないって事？」

何て頭の回転の早い子だろう。そう、遠目ならともかく、真

正面から見て、テムジンが彼女に気付かない訳がない。

「ええ、そうなの…」

「俺が何とかしてやるつか？」

「何とかって？」

「そいつを大会に出られなくすればいいんだろ？ ケガさせるつか」

「…！ ダメです！」

物静かな蒼の狼が声を荒げたので、少年はびくっとした。

「ふ…うん… そいつ、大事な奴なの？」

あ…また、この子を傷つけてしまう。

「違いわ。貴方がそんなに簡単に、人を傷つけるなんて言うのが、嫌なの」

少年は素直に蒼の狼を見上げた。

「じゃあ、どうすればいい？ 俺、あんたの助けになるよ」

「……………」

狼は息を吐いて、手にしていた手紙をたたんだ。

「何も…しなくていいわ」

「え？ だって…」

「皇子である貴方に、姑息な画策をやらせる訳にはいかない。

これはワタシの問題だもの」

王宮の方で祝砲が打ち上がる音がした。

「お父上が帰っていらしたわよ。さ、もうお戻り下さい」

少年は兜を被り、青鹿毛を引いた。

「あんたは、そつやつて、いつも、何も話してくれないんだ！」

「トルイ様」

女性の声に、少年は一度だけ振り向く。

「お出迎え、嬉しかったわ」

トルイは答えなかったが、頬から下の表情がちよっとだけ和らいだ。そして片手を上げて、また森の中に分け入って行った。

残された蒼の狼は、今一度、兄の手紙を眺めた。

兄が目を離れた隙に、イルアルティは王都に招かれ、もう出立した跡だったって事が、詫びられていた。

「兄様のせいではないわ。引き寄せられる運命にあるのかもしれない」

蒼の狼は、手紙を胸に押し当てて、王宮の方を見やった。

覚悟を決めよう。なるようになるしかないわ。でも一つだけ、この身に代えても守らねばならない事がある。

イルアルティが、ここで、悲しい目に遭ってはいけない……！

都では、メインストリートに人が集まり、帰還の大軍に喝采

が送られ、お祭り騒ぎになっていた。

トルイは兜を深く被って青鹿毛を引きながら、人気のない路地裏を歩いていった。

催し物の招待者が宿泊する宿は目星が付いている。蒼の狼はああ言ったけれど、困っていたのは確かだ。

「あいつにケガさせるのがダメなら、馬の方に言い含めりゃあいい」

イルアルティは宿に一人でいた。族長達は凱旋パレードの見物に行った。自分も行くとしたけれど、人波に揉みくちゃにされ、三步でへこたした。

「ああ〜もうダメ、早く帰りたい〜」

ふと窓の外を見ると、既に入る人影がある。

「あの兜……！」

イルは外に出て、そろそろと厩の入り口に近付いた。話し声がする。

「だから、こうやって、頼んでんじゃないか！」

……他に誰かいるのかしら……？ そおっと覗き見ると、さっきの兜の男の子が、イルの尾花栗毛の正面に立っている。

「主人に忠実にも程があるぞ！ ちったあ、自分で考えろ！ じゃあないな……」

男の子は兜を脱いだ。血のように赤い髪が肩にかかる。イルは息が止まった。

彼の手が、尾花栗毛の頬を両側から押さえ、妖しく銀に光る眼で、馬の瞳をスイッと見据えた。馬が怯えた呻きを上げる。

「ややや、やめて——!!」

イルは思わず叫んだが、声は上ずってかすれた。銀の眼が振り返った。

「ちえっ！ ほら、お前が素直に聞かないから、ご主人様がケガをする事になるぜ。…おっと！」

イルがテンパって振り回す三本ホックを、男の子は鼻先で避けて掴んだ。

「危ねーなあ！ 死んじゃうだろ、こんなん当たったらー！」

「イイイ、イルの馬にイ〜！ 呪いを掛けようとしたあア〜！」

「そんな大したことしないって！ ちょっと一、三日腰が抜ける程度で…」

「やっぱのイ〜〜！ この卑怯モノ！ 正々堂々と勝負すればいいじゃないのオ!!」

「何だと！ 俺が卑怯者?! そんな事するもんか?!」

「しよつとしてたじゃないのオ〜〜!!」

さすがにこれだけ騒げば、宿に残っている従業員も気付く。



外にドヤドヤと人の気配がした所で、少年は舌打ちして兜を被り、窓を越えて外の青鹿毛に跨がった。

「逃げるの?! 卑怯モノ!!」

「卑怯なもんか! 正々堂々勝負してやる! 忘れるな!」

そう言うつと馬を返し、身を低くして宿と反対方向へ駆け去った。

イルは三本ホックを抱えたまま、ハタハタと座り込んだ。

くやしい! あんな卑怯なヒトだったなんて! 明後日は絶対負けたくない...! 負けるもんか...!!

「親父イ、頼みがあるんだけど...」

「久方振りの父親への第一声がそれかい?」

金冠の武装を外しながら、目の中にに入れても痛くない四男坊に頼み事をされるのが嬉しくてたまらない様子で、テムジンは、ににっと笑った。

競馬大会の日は、朝から快晴だった。

城門から宮殿まで続く街のメインストリートがコースに設えられ、各地方の代表者達が、この日の為にヒカヒカに磨き上げた馬に、誇らしげに騎乗して、行進した。

街の賑わいを、丘の上の一本杉の天辺でっぺんから、蒼の

狼が見つめる。

肩には、今朝方手紙を運んで来た鷹が、すましてとまっている。溜め息を付きながら、今一度手紙を広げて読み返した。

《自分は外せぬ用事で行けないのが残念! イルの晴れ舞台、是非、鷹の眼に記録して送り返してください!》

「あの好好爺~~~~!」

『うっかり』イルを行かせてしまったって、わざとじゃないでしょうね!

ふう...と、また溜め息を付く。兄は、いい加減テムジンに隠しておくのはやめろ、と言いたいのだろう。遅くなればなる程、皆が傷つく。

テムジンも昔ほど『見える者』にこだわっていない。トルイを戦場に連れて行かない事でも分かる。

万が一、テムジンがイルを欲しがっても、もう幼子じゃない。自分の人生は自分で選べるだろうし、そうさせてやるべきだ。

「あら...?」

特等席の王族のテラスに、トルイの姿がある。兜を深く被っているとはいえ、人前に姿を現すのを嫌う子なのにな?

大勢の立派な騎手名馬の中で、イルも愛馬も、見るからに貧

相だった。

いつもなら挫けそうになる所だけれど、今日は、そんなのも気にならない程の、いきり立つ理由がある。

「あいつ、何処にいるんだろう?」

馬群の前の方でざわめき上がった。

「なにになに? どうしたの?」

「決勝で勝ち残った者と、皇子がマッチレースをやるんだってさ。それに勝って初めて優勝だとか」

「末の皇子だろ、まだ十二、三の。まあ、ちょっと遊んでやって、最後に勝ちゃあいいんだろ。モンゴルの大王も親バカなんだな」

テラスでは、王の後ろでトルイがふてくされている。

「俺は普通に参加して、予選から走りたかったのに」

「それじゃ可哀想だろ」王が面白そうに振り向く。

「お前と一緒に走らされる面々が…」

妃が男達の策略に盾をしかめるが、こういうのには慣れっこな感じだ。気入りの娘達と、勝手に素直に楽しんでる。そういうのが、この大王の正妃でいるコツらしい。

背の低いイルからテラスが見えなかったのは幸이었다。

見当たらぬ敵に闘志を燃やして、あっと言う間に勝ち抜いて、

周囲の度肝を抜いた後。マッチレースの相手がテラスから降りて来るのを見て腰を抜かすまで、『兜の君』の正体を知らなかったのだから。

テラスから降りる前、王がトルイの肩に腕を回して嬉しそうに囁いた。

「ふ・う・ん・…あの娘? お前さんの気になる娘って? ふ

うん、ふうくん♪」

「そんなんじゃない!」

「じゃあどなん?」

「三本ホックで追いかけて回されたんだ!」

階段を駆け降りるトルイを、テムジンはすっこい嬉しそうに見送った。

「いいねえ、青春だ……」

スタートラインに突っ立ったイルは、馬に乗ろうともしないで茫然自失としている。

青鹿毛に跨がったトルイが、急せいて近付いた。

「どうした? 早く決着着けようぜ、俺が卑怯モノかどうかな

っ!」

しかしイルの目は焦点が合っていない。

「ワタ…ワタシ…ワタワタワタ……………」

「おい？」

「う…打ち首になるの…？ お…皇子様に…三本ホックを…」

「阿呆か！ そんな恥ずかしい事、公（おおやけ）にするか！
俺はお前と…、あああ！ もうー！」

トルイはひらりと青鹿毛から飛び降りて、イルをヒョイと抱え、馬上に押し上げた。

場内にごよめきが起こる。戸惑いのごよめきではなく、子供達の微笑ましい行動に対する、クスクス笑いのさざめきだった。

しかしイルはカチコチのまんまだ。ここまでカントリーガールだとは思わなかった。こんな奴に勝っても意味がない。

正々堂々勝負してやる為に、わざわざ、大っ嫌いな公衆の面前に出て来たというのに！

「おい、しっかりしろよ！ 『あのヒト』も見ているぞー！」
イルがピクッと反応する。

「…ダシ…？」

「お前を大事に思っている、蒼い髪あのヒトだよ！」

一瞬でイルの目の焦点が合った。

「あのヒトを知っているの?!」

「勝ったら教えてやるよ！ 行くぞー！」

「待ってー！」

二人はロケットスタートした。

トルイの青鹿毛が先に立ち、余裕一杯でイルを振り向いて、犬歯を見せて笑った。

「待って！ 教えて！ あのヒト！ 誰なのっ?!」

イルは必死で馬を駆りながら追い付こうとする。

「聞こえないなあ！ この馬に並んでみろ！」

「……!!!!」

イルは精一杯集中した。いつもより、もっと！ …風を、もっと、集めて！

今までにない感覚が来た。イルの尾花栗毛がぐん！ と抜き返して、歓声が上がる。しかし二人にはそんなの聞こえない。

「貴方もあのヒトが見えるの?!」

「見えるどころか、俺に風の使い方を教えてくれた！」

トルイは本気の風を呼んだ。蒼の狼は俺のもんだ！ こんなどんくさい娘に負けてたまるか！

「待って、待ってー！」

イルは更なる風を掴まえて、しっかり着いて来る。引き離せないまま二頭並んでゴールを通過した。

しかし二頭は止まらず、王宮前の広場を回り出した。場内は大歓声だ。

「俺はあのヒトに、力の使い方、抑え方、剣も馬術も、みんな教わったんだ!」

今度は広場を後にしてコースを逆走した。

「するい…! ワタシ、何も教わってない!」

「…?? お前、じゃあ、どんな関係なんだよ!」

「ただ見つめられていただけ!」

「見つめられて…?!」

テムジンが立ち上がった。

「城門を開けろ——!!」

城門なんか見えていなかった二人は、開け放たれた扉から草原に飛び出した。既に馬の脚が地面を掻いていないのを、イルは気付いていない。

「あのヒト、あのヒトは、イルのお父さんかもしれないんだもん!」

「え……?」 トルイが言葉に詰まった。

「蒼の狼は、違う……女だ……」

次の瞬間、イルは我に返って集中が切れた。

空がぐるりと回って、真っ白な雲が凄く早さで流れた……

……

地面に叩き付けられたと思ったけれど、衝撃はなかった。目の前に白い腕が交差していて、誰かに抱き止められたのが分かった。

辺りにキラキラが舞っている。青空を背景に、青鹿毛と兜の少年。そして初めて近くで見る、緑の草の馬……。

「狼——!!」 兜の少年が青ざめて駆け寄って来る。

「狼……大丈夫か?! 狼!」

イルは首を起こして、後ろを振り向いた。

自分を後ろから抱えるように護ってくれたのは、蒼い髪の女性だったが…馬の蹄に引っ掛かったのか、額から血を流している。

「…大丈夫ですか?」

女性は、自分よりも、イルを気遣った。静かな、優しい声だった。

「あ……あの……あ……」

イルは慌てて女性の上から退いた。

「狼……」

トルイは兜を取った。泣き出しそうな顔だ。

「この娘はまだ風を使うことも制御する事も知りません。そん

な事も分からなかったのですか？」

女性は、イルに対するのとは打って変わって、厳しい声で言った。

「……………」

「まあ、でも、ワタシの責任です。貴方の気持ちも鑑みず、こんな事を頼んでしまった」

トルイはかぶりを振った。

「違つよ、狼に言われたからじゃない。こいつと約束したんだ。」

正々堂々勝負するって」

「それで…」

女性は優しい顔になって、トルイを見つめた。

「気が済むまで、正々堂々勝負出来ましたか？」

トルイも狼を見つめた。

「うん…」

「あの、これ…」

イルが自分の頭に巻いていたスカーフをほどいて、女性の額の傷を抑えようとした。真っ黒い髪がクルクルと波打って、背中を流れる。

女性の表情が止まった。空色の瞳から、はらはらと雫が落ちる。

「アル・カンシラ…！」

* * *

イルが聞いたこともないその名前を、街から馬に乗ってやってきた男の人も、やっぱりイルを見て、凍り付いたように眩いだ。

その男の人は、黙って膝まついて、女性の白い額の傷に手を添えた。

「縫わなきゃね…立てるっ」

女性は力なく首を振る。見ると、足首も挫くか折れるかして、だらんとなっている。

「あっ…」

イルが小さく悲鳴を上げる。

抱き起こされた背中に細い羽根があって、それが両方とも逆な方向に折れ曲がっていた。

キラキラ舞っていたのは、散らばった細かい羽毛だったのだ。

「ちょっと我慢して」

男の人は女性を抱き上げて、草の馬の上に押し上げた。そして自分も草の馬に跨がり、女性を抱えながら手綱をとった。

「ああっ！」

イルは悲鳴をあげっ放した。草の馬はすうっと垂直に上がり、

空中で停止した。

「西の森に運ぶ。トルイ、このお嬢さんを城の客間にお通しして。一重にもてなすように指示してから、お前も森に来なさい」

「はご…」

草の馬は上昇して西へ飛んで行った。イルは茫然と見つめてくる。

「行くぞ」

トルイが兜を被って促す。

尾花栗毛は怯えていて、草の馬がいなくなつてやっと戻つて来た。

「……………」

「お前のせいじゃない、俺が悪かつたんだ。蒼の狼の言つ通り、風の制御も出来ないお前を挑発し過ぎた」

「わかんない…」

「分かんなくてごう」

「風の制御って何？ あの女の人、誰？ あの緑の馬、何なの？」

「フルい…どれも語るのを止められている事ばかりだ」

「アル・カンシラって誰…?!」

「俺だつて知らないよー!」

トルイは、動揺して半泣きのイルを持って余しだした。

「一つだけ教えられる事がある。お前、とんでもない勢いで投げ出されたんだ。風の魔法なんかじゃせんせん止まらない位。

蒼の狼が受け止めてくれなきゃ、今頃そつやつてペラペラ喋っている事も、出来なかつたさ!」

西の森のバオ。

「足は折れてはいない、でも当分安静だな。額は…俺が縫つたから、ちよつとは跡が残るかも。ごめん…」

「……………」

「羽根は…ごめん、俺には分からないや、どう手当てしたらいいのか。一応固定はしたけれど」

「……………」

「オタネ婆さん呼ぶ?」

「…いえ、お婆さんにも多分分からないわ。羽根の生えた蒼の一族なんて、初めて見たつて言つてた」

「……………」

「ごめんなさいね、貴方、お城へ戻らなきゃ…」

「大丈夫、ヴォルテに任せてきた。俺より仕切りが上手い。若い二人の旅立ちに拍手を…とか言つて、城門を閉じちまつた。」

お陰で野次馬が来なくて助かった」

「素敵な女性(じつ)だわ……」

蒼の狼は笑ったが、力が弱い。羽根が折れた事で、かなり具合を悪くしているみたいだ。

「間抜けね。戦場でも、怪我した事なんてないのに」

「間抜けなもんか、あの娘(こ)は無傷だ」

「……あの子ね、…あの子……」

「うん……」

「イルアルティってうちの」

「うん……」

「ごめんなさいね……。アルはお腹に、貴方の赤ちゃんがいたの……」

「……そう……」

テムジンの瞳が動揺で揺れたが、表に出さないように努めているのが分かる。

「アルは、人質になって、恐ろしい目に合って、もう戦は嫌……って泣いたの。それで、兄に託したの」

嘘は言いたくない。でも、隠しておかねばならない事実はある。でないと、イルは『裏切りの者の子供』になってしまう。兄にもそれだけは打ち明けていない。

「じゃあ、今は？」

「拐われた時の傷が悪くて、あの子を生むとすぐ亡くなってしまったって。それで、兄が信頼できる人間にイルを預けたの」

「……そう……死んだの……」

テムジンは瞳をあげさせた。

「アル……子供を自分みたいな恐ろしい目に遭わせたくないと思っ
て、俺に内緒にしていたの？」

蒼の狼は黙って頷いた。本当は、裏切ってしまったテムジンの子供を身籠って戸惑っていたのだが、多分アルは、生きながらえても、子供は一人でひっそり育てるつもりだったろう。

「ごめんなさい……」

「アルが望んだんだろ。君は亡き親友の遺志を守ったんだ、それでいい。……それに……」

テムジンは蒼の狼の額に手を当てた。彼の中で整理を着けたよつた。

「君は、代わりに……トルイを、俺にくれた」

狼は慌てて頭を上げた。

「代わりなんかじゃないです！ あの子は、大切な……！」

人間として、皇子として育てるなら、引き受けてくれたヴォルテに礼儀を尽くす意味でも、けじめを付けて黙っていなければ

ば…と決めたのだ。

「トルイは…唯一無二の、大切なワタシの子供です!」

パオの入りが揺れた。

瞳に銀の光を滲えたトルイと、後ろに居心地の悪そうなるイル

アルティがいた。

狼は息が止まった。

「なんでその娘を連れて来た?!」

テムジンが怒鳴った。

「だって、…こいつが…」

イルが目を上げて、決死な顔で喋り出した。

「あの…あの、皇子様に聞きました! 蒼の狼さんは、皇子様とそのヒトにしか見えないって。それで…それで、もし嫌じゃなかつたら、イルに看病させて下さい! 治るまで身の周りのお世話させて下さい!」

黒髪がびよこんと頭を下げた。

「心配しなくても大丈夫なのよ」

狼は、肩を下ろしてイルを手招きした。おすおすと側に来た

イルの頬に、優しく手を添えた。

「いつもは遠くからしか見ていなかったけれど、こうして近く

でお話出来て嬉しいわ」

「貴方がイルを見ていてくれたヒト? あれ? でも男のヒト

がいつも…」

「ええ、ワタシは時々…いつも見ていたのは兄なの」

「そのヒトがイルのお父さん?!」

狼とテムジンは顔を見合わせた。話は聞かれていなかったようだ。

「お母さんはアル・カンシラってヒトでしょう。イルにそっくりなんでしょう?」

お母さんにそっくり…って言われるのは、イルの長年の夢だ。そうね、白眼の端の青さんかそっくり。でも、その話はゆ

っくり。これから看病してくれるのでしょう?」

イルは顔を輝かせた。

「置いてけぼりだな、俺は…」

トルイがあさっての方向を見ながらふてくされている。

「一応、今、衝撃の事実を聞いたのに」

そっちは聞かれていたか…。

「まあ分かっていただけだね。あんだ、母親以外の何者でもなかったもな」

トルイは口の中で呟いて目をそらす。子供の成長って早い。

大人が追い付けない程に……

「もひとつ、衝撃の事実を教えてやろうか?」

トルイが勿体ぶって、イルに話し掛けた。

「気が付いていないようだから、一応、言っておくけれど」

そう言いながら、テムジンの隣に立った。

「このヒト、俺の親父」

「…へ…?」

イルアルティが、ひきがえるみたいな口をして止まった。

「お・や・じ? 皇子様の・親父? お・う・さ・ま……?!」

どっしええええ……!!」

飛び上がるイルを見て、テムジンがトルイに耳打ちする。

「面白いな、この娘」

「面白えだろ」

貴方のお姉さんだもの… それはまだ、言わなくてもいいだ

ろ。今はまだ、束の間のこの穏やかさを味わってしよう。

「さあ、お前達静かに… 少し寝かせてあげなさい」

テムジンが二人の子供の肩に手を掛けるのをぼろっと眺め、

蒼の狼は噛み締めるような安堵感の中、目を閉じた。

肩の荷を降ろして、一番安心したかったのは、自分だった…

心配をかけたくないから兄には連絡しないで…というのは、

事ある毎の蒼の狼の口癖だったが、今回は上空で一部始終記録していた鷹が律儀に蒼の里に舞い戻ったので、一気にバシた。

競馬大会の翌日の夕方には、蒼白な蒼の長と、赤鬼のような形相のオタネ婆さんが、ダットン人の矢の如く飛んできた。

「兄様、お忙しいでしょうに、すみません…」

「何を言っんです、貴方はよくやりました。あの子が飛ばされた時、心臓が止まるかと思いましたが」

「受け身が甘いからそういう事になるんじゃない」

オタネ婆さんはそう言いながらも、挫いた足に持参の膏藥を塗り付けてくれている。しかし折れた羽根を見ると顔を曇らせ

た。

入り口でバサリと音がする。街の方に行っていたイルが、荷物を足元に落っことした音だ。

王が《軍馬の調教に暫くイルを借り受けたい》とお父さんに書いてくれた手紙を、族長に託して来たのだ。

「ああ…」

蒼の長が感激の眼差しで振り向く。赤ん坊の時以来、直接イルに逢うのは初めてだ。

「あなたが……べい!!」

長が何か言つ前に、イルが懐にタックルして来た。

「お父さん！ イルの本当のお父さんなんでしょ！」

あ…そうだ、聞かれた時、肯定してはいないけれど、否定もしなかったっけ。どうした物か…と、兄を見ると、『お父さん』という言葉を噛み締めてじーんとしている。放っておいた方がいいのかしらん？

オタネ婆さんがイルをねめつけて言った。

「人の娘、お前にはちゃんとした人間の両親がおるじゃろう？」

「だって…」

「お前を愛し育ててくれた者がお前の両親じゃ。人の娘が人外に閱わりを持ちたがると、ろくな目に合わぬぞ。とっとと故郷へ帰のなされ！」

敵しい…でもその通りなのだ。誰も味方してくれないので、イルは泣きそうになった。

「帰しちまうていいのかよお？」

戸口に片足を掛けて、オタネ婆さんの天敵が現れた。

「少なくとも、ちゃんと風の使い方を教えてやんないと、こいつ、おんなじ事、繰り返すぜえ！」

赤毛の皇子は、落としたり荷物を持って、イルと長の間に挟むように押し付けた。

「利いた風な口をききおって、小悪童(こあくどう)こわっぱが！」

「でも、まあ、その通りですね、では私が…」

「長様にそんな暇はお有りでない！」

オタネ婆さんの一括は、その場の総てを支配する。

「俺が教える？」

「ビヨッコがさえるでない！」

「じゃあ…」

「仕方ない、この婆が直々に指導してやろう！」

イルは硬直した。寄りよって、この場で一番『怖そう』なヒトが先生だなんて。と思う暇もなく、鼻先に杖の先端をピツと突き付けられた。

「挨拶はっ?!」

「よ…宜しくお願ひしま…す…」

「よおし！ みつつ数える間に馬装を整え、屋外に集合！ ひ

とぉ——っ！

婆さんは杖を掲げながら外へ出て行った。

「ままま・待ってくださあい！」

イルが慌てて頭絡を引っ付かんで追い掛ける。トルイは茫然と見送ったが、兄妹二人は肩を震わせてクスクス笑っていた。

「懐かしいわ…」

「オタネさん、楽しそうでしたね。まんざらでもないんでしょ」

「う」
「げ！俺、先生が蒼の狼でよかった…と胸を撫で下ろすトルイに、狼が楽しそうに振った。

「ついでだから貴方も受けていらっしやいな、上達するわよお」

「い…いいいよ、俺…」

イルが半泣きになりながら、オタネ婆婆さんのエンシ色の草の馬に跨がり、空中でグルグル、反復練習をしている。

婆婆さんの課したノルマをこなすまでは下に降りられないのだ。

木陰で一服つけるオタネ婆婆さんの隣に、トルイが現れた。ポケットから、ウォッカの小瓶を出して差し出す。

「ほおほお、いつの間にかこういう事を覚えるのかねえ？」

婆婆さんは、毒でも入っていないかと確かめるように眺め回した。

「母親に付いていなくていいのかわい？」

「兄妹二人きりの方がいいだろ」

「ほほほお、あのクソガキが、言うようになってきた、カカ

カ」

「そね、そね、ななへへててさ、め、め、無理に元気がいいじゃあうじゃあ、俺やあんたがいる」

「……………」

「折れた羽根がどんどん悪い色になるんだ」

「……………」

「治るのかな、…あんなので命落としてたりしないよね」

「……………」

「ねえ……………」

「すまんのお… この婆にも分からん事はある。お嬢がえらく弱っとるのは羽根が折れたせいなのは分かる。じゃが、どうしたら治せるのか、そもそも何故お嬢にだけ羽根がはえたのか、…さっぱり解らんじゃ」

オタネ婆婆さんが素直に折れるなんて初めてだ。それはこの問題の深刻さを意味する。

「じゃが確かにあの羽根がクッションになったから、お嬢もあの娘も、あんなもんで済んだのじゃが…」

二人は黙ってしまつて、パオの方を見やった。

「お嬢の命を守るにはのう…」

トルイは顔を上げ、すがるような目で婆婆さんを見た。

「切り落とすかのう……………折れた羽根を……………」

城の書庫の奥深く。

蜘蛛の巣とホコリにまみれて、書物のトンネルから真っ赤な髪が抜け出して来た。

「何か用？」

「あの…蒼の狼さんが、皇子様がしばらく見えなから、気づいてらっしゃいました」

イルは天井まで届く書物の山に目をパチクリしながら、一生懸命伝言した。

「ああ、今、何時？ すっごくここにいたから」

「……」

「俺が行ったって羽根が治る訳じゃないだろ」

「はあ、ごめんなさい」

「いや、お前が謝る下口じゃないさ」

「……」

「それ以外に、何か俺に用事があるんじゃないの？」

「今日の昼、西の森に蒼の長さんとオタネお婆さんが来て、王様と話をしていたんです」

「…ふうん…」

「蒼の里から医師を寄越す…とか、そういう話をしていました」

「…そうか…」

「いっくらですか？」

「何で？ 何が?!」

「皇子様ずっと調べているんでしょう？ 羽根を切り落とさなくて済む方法。書庫に潜ったり、方々の賢者を訪ねたりして」

蒼の狼が怪我して、一週間が過ぎていた。額の傷と足は回復したのに、羽根は折れ曲がって変色したままで、トルイが訪ねて行っても枕から頭が上がりず、困ったように微笑むだけだった。

イルが身を粉にして看病していたが、食欲もなく、オタネ婆さんの薬湯も効き目がない。それでとうとう、大人達は羽根を切り落とす方向で話を進め始めたんだ。

ここ数日トルイは、確かに折れた羽根の治し方を探して奔走していた。オタネ婆さんに聞いた風の末裔のお伽噺や数々の伝承を書き出し、関連のありそうな物を片っ端から読み漁った。

城の書庫に潜り、古い大きな地図を何枚も引っ張り出し、羽根のある妖精の居場所を探したりもした。

「いいも何も、あのヒトの命が優先だろ」

「そうですけれど…」

イルはじどろもじどろだ。

「何？ 何か言いたいの？」

「あの……イルは、あの羽根、本当に切り落としていいのか……って、気に掛かるんです」

「……お前……」

「だって何か理由があるから羽根がはえたんでしょ？ 他の誰にもない羽根が」

トルイも気に掛かっているのはそこだ。

あの時、トルイの目の前で、羽根はひとつの生き物のように広がって、二人を包んだんだ。

「飛べもしないし、何の為にあるのか分からないのよ……」

そう言っていた羽根にも、絶対何か意味がある。羽根を切り落とす前に、羽根って何なのか、知らなければならぬ気がする。

「コトリ……と、書庫の入り口で音がした。」

「誰……?」

ウォルテ妃付きの小姓が、二人がかりで、大きななごもちを運んでいる。

「トルイ皇子様？ あの、王妃様のお言い付けで、これを皇子様にと」

小姓達はなごもちを床に置くと、トルイと目を合わさず、そそくさと去って行った。

「……? あの人は何を……?」



トルイはのそいでびっくりした。ながもちの中は、きれいに整頓された書物…有翼人に関する文敵が、びっしりと詰まっていた。

「…何で？ 俺…？」

イルが書物の一つを手に取り、パラパラと繰った。

「お城の王妃様はかなりの蔵書家で博学でいらっしやると、イ
ル達平民にも伝わっています。でも、行動がお早いですね」

「お前…？」

「さっきお城に入った所で、呼び止められたんです。皇子様と
王様の様子が最近ただならぬのは何故か？ って」

「それで、ペラペラ喋ったの？」

「皇子様の血を分けた方のお母さんが羽根が折れて病んでいて、
書庫に潜って治す方法を探しているんです、って。何もやまし
い事はないと思って」

イルはケロリと言った。

「いけなかったですか？」

「いや……」

トルイは書物の山の前で、何とも言えない気持ちになった。

そして、あの人が自分を知らないのと同じ位、自分もあの人を
知らないのに気付いた。

イルが西の森に戻った後、午後一杯かけて、トルイはながも
ちの書物を調べた。そして、とうとうながもちの底の古い民話
の中に、それらしき物を見つけた！

西南の地、風の生まれいする山。

全ての風の精の発祥の地。

羽根をなくした有翼人が、そこで羽根を授かる…という、伝
承。

古い地図をつぶさに確かめると、確かに西南に『風出流山か
ぜいするやま』と記される頂いただきがあった。

意識すると、数々の有翼人の伝承がそこに繋がる。

…そして、夜中の森をかき分けパオに近付くトルイがいた。
地を走る馬では間に合わない、草の馬でなければ。どんなに
叱られたっていい、風出流山(かぜいするやま)に行くんだ。

薄闇の中、草の馬の気配を探す。高い所に二つの目が見えた。

「え…っ？」

草の馬だけれど…、蒼の狼の馬じゃない？ 二つでっかい馬、

これは……

「長さんが置いて行ったんです」

イルが、蒼の長の『闘牙の馬』の影から姿を見せた。

「皇子様が必ず草の馬を借りに来るから、脚の速い馬の方がいいでしょう……」

「……長……」

向こう一年は、好好爺とかロリコンとか思わないよ……。

「王様は、皇子様が何をして来て、何をしようとしているか、存じなよかったです」

イルが大事に抱えていた剣を差し出す。蒼の狼の破邪の剣つるぎ。

「三日だけ待つって仰ってました」

「親父……」

トルイは旅装を鬮牙の馬に掛け、勢いをつけて跨がった。

「よしー！」

イルも後ろにちゃんと跨がる。

「行きましようー！」

「まてまてまて！ お前は降ろろ！ 何考えてんだ！」

「イルだって助けになりたいです」

「お前の何が助けになる?!」

「なるー！」

いきなりオタネ婆さんが現れた。暗闇から急に出現すると、心臓が口から飛び出す程びっくりします。

「努力していたのはお前だけではない！」

振り返りよく見ると、そこにいたのはいつもの泣き虫イルではなかった。大切なヒトの役に立ちたい……！ 決意に満ちた、生傷だらけの顔だった。

「最低限は鍛えたわい」

「宛(あて)は……」

「西南の、風出流山(かぜいずるやま)」

「古い伝承か……しかし、そういう中にこそ真実はあるもんじゃ、だがあそこは……ふむ……」

オタネ婆さんは自分の杖を差し出した。

「ほれ」

「……」

「持って行け、あの辺はちいとテンジャラスじゃ。人間と見ると敵意を見せる連中が多い。そいつを見せたらフリーパスじゃ」

「そうなの？」

受け取った杖は先端に石櫛(いしむし)が付いているが、近くで見ると傷だらけで、所々欠けている。

「若い頃のヤンチャの証じゃ」

オタネ婆さんはウインクした。笑う下(した)口(くち)なのか……？

分らないので、引きつった笑いを返しておいた。

「行くがよい！」

オタネ婆さんの号令で、鬪牙の馬は力強く飛び立った。二人を乗せて、西南の地、風出流山を目指す。

いきなり凄い加速で、あっと言う間に雲の上に出た。

「……マジかよ、すげえ……」

オタネ婆さんが二人を見送った後、バオに向かうと、テムジンと狼が起きているのが分かった。

「大丈夫かしら……」

「大丈夫だ。二人とも、俺等、みんなの子供だ」

婆さんはフンと鼻を鳴らし、ウオッカ片手に暫く月見と洒落込む事にした。

しまった、杖をやっちまったから、明日からテムジンを追っ掛け回せなくなっちゃった。

イルは根っからの草原育ちだ。山っていつても、頂がひとつボンとある、饅頭のようなお山を想像していた。

だから今、目の前に連なる雪を頂いた山脈の大群を見て、くらくから来ている。



しかも西南っていうから油断していたのに、こんなに寒いなんで、ずるい！ トルイが、馬に付けた革袋から毛皮を引っ張り出して、イルに投げて寄越した。

「皇子様はっ」

「いいから着ている、風邪ひいてこれ以上足手まといにならないでくれ」

トルイは、幼い頃から蒼の狼に連れられて、草の馬で飛んでいた。蒼の里の子供と同じように訓練も受けているので、飛行は慣れた物だった。

一方のイルは、オタネ婆さんにちよちよっと手解きを受けた程度で、いきなり蒼の里で一番速い闘牙の馬で雲の上を飛んだのだ。馬上での怖がりっぷりは、何度、叩き落としてよろづか…と、思わせる物だった。

「行へせ」

地図を確認したトルイが馬に跨がる。

「は、はっ」

イルはこれ以上不機嫌にさせないよう、一生懸命従った。草の馬は飛び立ち、山間を縫いながら進む。

「多分、あの頂だ」

剣山のようにそびえる嶺々の、ひときわ高い頂を指す。

「急ぐ」

不意に横風が吹いた。

「うわっ?!」

何とか立て直した所に、イルが声を上げる。

「あっ、あれ!」

風が吹いた方の斜面で、岩塊が山肌を転がり落ち、雪煙の中から、十匹ばかりの見た事もない生き物が飛び出して来た。

「ニンゲン…! ニンゲンが、キタ!」

蝙蝠の羽根を持った灰色フチの獣が、曲がった爪を振りかざし、有無を言わさず襲い掛かって来た。

「ちえ…!」

トルイが剣を抜く。蒼の狼が魂たまを吹き込んだ破邪の剣(つるぎ)。自分だっって使える筈だ。

しかし獣達は急に表情を変え、貼り付いたように停止した。

視線を辿るとトルイの後ろ…、イルが掲げる、石榴石の杖に集中していた。

「ア…アネコ…? オタネのアネコ…?」

よかった、よく分かんないけど、皇子さまの役に立てたみたい。

「ナンデ、ソナナ、チチンダ〜?!」

色んな意味でふてくされているイルを置いて、トルイはこの辺りの魔物達に話を聞く事が出来た。

もっとも知識はあまり多くはない。分かったのは、あの山の中腹に、確かに有翼人のいた時代があった事。今は神殿跡が残っているが、恐ろしいモノの巣窟になり、自分達も近寄れない事。

「その恐ろしいモノは、この杖に……ひれ伏さない…か…」
魔物達が一齐に首を横に振ったので、トルイも覚悟せねばならなかった。

「イル、やっぱりお前、ここに残るか?」

「行きます! 鈍かったら置いておくからいいから。必ず追いついて、皇子様の助けになります!」

「お前…その自信たっぷりりの根拠は何処から来るの?」

「オタネお婆さんが、お前は必ずあの子の助けになる、だからへこたしないで食らい付いて行けって」

誰だあ…? 最初にこの二人にタッグ組ませたの? 滅茶滅茶やっかいな存在になっちまったじゃねえか!

蝙蝠ブチの魔物達に神殿の場所を教わり、再び山沿いに進ん

だ。

鬮牙の馬は頑張ってかなりな高度まで二人を運んでくれたが、ある地点で飛べなくなった。空気が薄くなると、風を掻けなくなるのだ。

「ここからは歩きだ」

馬が雪を踏んでくれ、二人が後に続く。途中でとっぴり日が暮れて、さすがにもう進めなくなった。

風を避けられる岩の隙間を見つけ、そこで夜明かしをする事にした。馬は馬装を解くと、勝手に自分の楽な場所を選んで休みに行った。

「ああいう所、普通の馬と変わらないのね」

二人で並んで座り込む。イルが着ていた毛皮を脱いで、二人でくるまった。

真っ暗で鼻先も見えない中、山鳴りだけが「うーうー」している。

「お前さ…」

「はっ?」

「皇子様って呼びの、やめない?」

「はあ…」

「トルイでいい」

「でも…」

「俺の好きな奴で、『皇子様』って呼ぶ奴、いなこ」

「……」

「そもそも俺達、正々堂々勝負した好敵手じゃないか？」

「……」

横を見ると、口を半開きでクウクウ寝入っている『好敵手』

がいる。おやすみ五秒かよ！

まあ、自分が行く直前まで、婆さんにガシガシこかれていたらしいからな。よく着いてくよな、あの婆さんに…と思いな
がら、赤毛の皇子も眠りに落ちた。彼だって初めての事だらけ
だったんだ……

夜半、頂直下の神殿から一つの光が降りてきた。

ソシは岩陰の二人の子供を覗き込み、しばし停止してから、

また神殿へ飛んで行った。

昨日蝙蝠フチの魔物に、八頭身のスレンダー美女だったオタ
ネ姉御の武勇伝を聞かされたせいか、悪夢にうなされて目が覚め
た。

イルが起き出して草の馬の馬装をしている。背が低くて頭絡
が届かない。ピョピョピョ飛び上がる後ろから、手を出してひ
よいと掛けてやった。

「あ、おはようございます、……トルイ…さま…」

「お前さ、出来ない事、無理にやろうとしないで、人に頼れよ」

「……」

イルがちよっとびっくろした顔でトルイを見た。

「何だよ」

「お父さんとおなじ事、言う…」

「長？」

「ううん、人間の方のお父さん」

「ああ…」

干し肉を裂いて分けてかじりながら、更に雪山を登る。

「トルイさま…の、人間のお母さんは、王妃様なんでしょう？」

「ああ、まあな…」

「好き？」

「どつてもいいしろ」

「……」

「お前は人間の両親が好きなのか？」

「…はこ」

「幸せだな」

「……」

「もしお前がこんな真っ赤な髪で銀の眼をしていたら、お前の

両親は大切にしてくれたかな？」

しまった、そんな事言うつもりじゃなかったのに。しかしイルは、暫く視線を空中に泳がせ、ああ、そうか…と呟いた。

「イルは、ちっちゃい時から群青色の髪の毛の不思議な人を、ずっと見ていたから…」

「…?」

「トルイさまを初めて見た時、ああ、都には赤い髪の毛の人もいるんだなあ…って思いました」

トルイは目の前で水風船が弾けたような気がした。

「銀の目はちょっとびっくりしたけれど、やっぱりイルが知らないだけで、その辺に普通にいるんだろ?なあ…って。イルのお父さんもおなじだと思えます。子供の頃、蒼い髪の子供と友達だったから、例えば赤い髪の毛のイルが落っこちてても、あんまり不思議に思わなかったんじゃない? 何笑ってるんですか?」

「ああ………何でもない………」

笑い過ぎて涙が出て来た。

こんな雪と氷の世界で、何か溶かす力があるなんて…オタネ婆さんの見立て通り………こいつ、凄いや…。

四つ足の馬では厳しい角度の崖が出現した。草の馬はこま

でだ。手綱を鞍に縛り付け、「明日の夜まで戻らなかつたら、お前独りで鎮守の森に帰ってくれ」と、トルイが言い含める。

それがどういう事なのか、分かっているイルも真剣な面持ちで聞いていた。

二人で助け合って崖を登った。

登りきった棚で、眼の前にあった物は……巨大な、氷の壁だった。ここから先は進めないのか?

しかしイルは、何故かニコニコしてトルイの手をとった。

「やりましたね!」

トルイは不思議顔で、何が…? と聞いた。

「え? 確かに神殿にたどり着くだけじゃダメなんだけれど…」

「神殿…って、どれ?」

イルが指差す方向は、氷の壁がそびえるばかりで、何も見えない。

「………」

イルも黙ってしまった。

妖精を見る事が出来る者でも、関わりがないと見えない事がある。そういうのと関係あるんだろ?」

「神殿は…あるんだ?」

「は？」

「どんな神殿？」

「太い氷の柱が沢山そびえていて大きな入り口。奥は山の中を掘り抜いた感じで、どこまで続いているのか…。だけど表面が氷漬けです」

「入れないの？」

「……ここは風の神殿なんですよね」

「ああ…」

「風の妖精に開かれるようになってきているかも。風の魔法を使ってみたらどうでしょう？」

イルが示す神殿の正面に二人で立った。オタネ婆さんの杖を掲げ、習った基本の、小さな風を起こしてみた。

——パシン——

いきなり氷壁の分厚い氷が一気に砕けた。

びっくりにしている暇はなかった。砕けた氷が鋭い切っ先を二人に向けて、一斉に飛んで来たのだ。

あまりの事に立ち尽くす二人……。

地を這うように一直線に雪を蹴るモノがあった。それは子供達の側まで行くと、二人を引っ掛けて垂直に上昇した。

氷のナイフ達は、二人のいた場所の地面に刺さり、重なり、砕け、……静かになった。

いきなり空に連れて行かれた二人は、今度は急下降し、地面にゴロンと放り出された。

何が起こったのか？ 呆然と目を上げて…息を呑んだ。二人に見慣れた色が、目の前にあった。

「お前等の来る所じゃねえ！ どチビ共が！」

燃えるように真っ赤な、牛ほどもある巨大な狼…！

口の端からは炎がチロチロ洩れ、銀の三拍眼は背筋が凍るような光を放っている。昨日会った小物達とは明らかに一線を画する、格の違う魔の物。

二人は…取り分けトルイは、ショックを受けて混乱していた。何で俺と同じ、銀に光る目なんだ?! …何で…何で…俺の髪とまったく同じ色の体毛なんだ??

しかし狼は踵きびすを返すと、「帰れ！」と言い捨て、氷壁の方へ跳び、姿を消した。

「待て！ 待って…!!」

トルイが追い掛けかけるのを、イルが腕にぶら下がって止めた。

「邪魔するな！」

振り向き怒鳴るトルイの両頬を、パチンとイルの両手が挟んだ。

「何を……！」

「貴方は誰ですかっ?!」

「?..?」

「何しにここへ来たのっ?!」

「……あ……」

「時間がないんですよ。魔物が、トルイさまを惑わせようとしているのかもしれない」

「あ……ああ、……あ・あ・あ・!!」

頬を叩かれた拍子か、トルイの前にいきなり氷の神殿がそびえ立った。

「見えるんですか?」

「ああ……」

「よかった……」

「俺……信念が足りなかったのかもしれない……」

トルイは肩で息を付いて、しっかりとイルを見た。

「すまない……」

「いえ、すみませんでした、ほっぺ、痛かったですか?」

「……いや……」

何だか、オタネ婆さんが無理矢理イル(こいつ)を伴わたのが、分かってきた気がする。こいつは規格外なんだ、色んな意味で……。

とにかく結果だけ見ると、氷は砕け神殿の入り口は開いた。

「神殿っていうからには、奥に本殿があったりするんですかねえ?」

二人は正面の段を登り、中へ入った。玄関からいきなり奥へ続く長い廊下になっている。枝道は一切なさそうだ。

「何だか、嫌な作りだな……」

「奥に……行くしかなさそうですねえ」

二人並んで氷の廊下を歩き出した。恐ろしいモノの集窟という話だが、静か過ぎて逆に気味悪い。

床も壁もツルツルで、二人の姿を二重三重に映し出す。隠れる所もない真っ直ぐな廊下は、トルイを緊張させた。

「ほっぺ、やっぱり痛かったですか?」

「違つって! 何故それをそんなに気にする?!」

「皇子様だから、ほっぺパチンされた事ないかなあ……って」

「ほっぺパチンて……」

「イルのおうちではそう言って、悪い事したりワガママ言った時に、パチンってされるの」

「親父さんが？」

「お父さんもお母さんもお兄ちゃんもお姉ちゃんも。イル、末っ子だから、一番いっぱいされる」

「……………」

「された事ない？」

「ああ…ないな… 頬を張られた事はあるけれど」

「お父さんに？」

「蒼の狼… まだ訓練始めてないのに勝手に草の馬を飛ばして落っこちた時」

「あの優しそうなヒトが？」

「怖いんだって、先生モードの時。俺、吹っ飛んだもん」

「へえ〜」

「……………」

「……………頑張らなきゃですね」

「ああ……………」

何だか喋っている内にモヤモヤが消え失せた。さっきの赤い獣は、やはり自分を惑わそうとする魔の物だったんだろう。

長い廊下の突き当たりに『いかにも』な面開きの大扉があった。片側の取っ手を二人で持って、思いきり引いた。

やっと出来た隙間の向こうに現れたのは、『いかにも』な感じの、何かの儀式に使われそうな天井の高い大広間だった。

「見て……………」

氷浸けになった壁のレリーフに、羽根のあるヒトの姿がある。

蒼の狼の羽根みたいに細くなくて、厚みのある、たっぷりとした翼だ。

二人は正面の一際大きなレリーフの前に立った。右手にとくろを、左手に一本の羽根を持った、巨大な有翼人の像。

他のレリーフと違って、生気を感じられる。

「このヒト、答えてくれるかも… 風の魔法、使ってみます」

「おい、さっきみたいな事になったら……………」

「トルイさまは下がっていて。イルに何かあったら、助けてくださいね」

イルは、部屋の真ん中の、床に太陽の模様のある『いかにも』な場所に立った。

トルイは、イルの背中合わせの位置に立ち、あらかじめ剣を抜いて構えた。これでどこから何が飛んで来ても対処出来る。

「……………」

イルは腰に挿していた石榴石の杖を掲げて、教科書通りの呪文を唱えた。きれいな風が天井から渦巻き降りてくる。

これで何も起きなかつたら手詰まりだ。

しかし何か起き過ぎるくらい起こった。

急に大勢の生き物の気配がして、ざわざわと空気が激み、黒い影が天井をシュンシュンと、飛び回らした。

凍るようなおぞましい声が反響する。

〈羽根を寄越せ……〉

〈ハネを……ヨコセ……ハ・ネ・ヲ……〉

ヒュッと真つ黒い塊が天井から飛んで来た。

「うわあり」

慌てて剣で薙ぎ払うが、水を斬ったみたいな感触だ。それは斬られても平気なようで、ぶよぶよしながらまた天井に戻った。

「術を使って祓う種類のモノなのか？」

宜詞は習ったが、実戦の経験なんて、勿論ない。背後のイルは、恐怖で声も出ない。尻込みしている場合じゃない。

精一杯集中して宜詞を唱えると、剣がいきなり重さを含んで、トルイを体ごと引く張った。剣に振り回されながら、必死でしがみ付いている少年を、天井の黒い影は嘲笑った。

影はおぞましい声で笑いながら数を増やして天井を埋める。

隠れていた他の魔物達も、二人がたいした事ないと分かって、徐々に姿を現し、一斉に襲って来そうな気配が溢れた。

——「こっちだ！」

喧騒に混じって確かに声がした。

——「走れ……！」

巨大レリーフの方だ。

トルイはイルの手を引いて駆け出した。駆け出したとたん、その足は空を切って真つ暗な空間に落ちた。

真つ暗な中、上も下も分からずに、トルイはいた。

「イル……？」

手を繋いでいたはずのイルはいない。でも近くに気配はある。

〈……ほお……〉

低くエコーのかかった声がした。

〈……羽を持つ資質がある……、だが純血ではない〉

「……？」

別の声もした。

〈……しかし今となっては稀少……〉

「誰だ……！」

目の前の暗闇に、さっきのどくろを持つレリーフが浮かんだ。

同じような感じで数体、別の有翼人のシリーフも浮かび出る。

広間にあった時よりも何倍も大きい。皆、羽根を持っているが、

一重三重に重ねて持つ者もいた。

トルイは見上げるような有翼人の像に取り囲まれる形になっ

た。

「あー、俺…羽根…折れた羽根を…」

トルイが話し終わる前に、像が喋り出した。

〈…羽根が欲しいのだから〉

〈…羽根が欲しくてここへ来たのだから〉

「えと、ちよっと違くて…」

〈…羽根を手に入れたいか〉

〈…純血ではない身で神に近付きたいか〉

何を言っているか分からない上に、エコーがかかり過ぎて

口々に喋るので、頭がワンワンする。

「俺はあ！折れた羽根の治し方を探しに来たの！俺の母親

の折れた羽根！」

声の切れ間にやっと言えた。

〈…ほお〉

〈…母親がいるのか〉

〈…そちらは純潔か？〉

どうして大人って、こちらの言っている事と別の所に食い付くのだろうか？

「純血とか知らないよ！母親のオ折れた羽根！治したいの！」

〈…ではよかったな〉

〈…その羽根を母親に与えるがいい〉

「え…？？」

瞬間、体のバランスが崩れてよろめいた。そして真っ黒い空間に、さっきの廊下みたいに幾つもの氷の鏡が現れた。

「えええっ?!」

トルイは鏡に映った自分の姿に驚愕した。背中にすっしりとした、青い半透明の羽根があるのだ。

たとえ羽根がなくても、トルイはそれが自分だと気付くのに時間がかった。だって鏡に映った少年は、蒼の狼とおなじ、綺麗な空色の髪と目をしているのだ…。

「どついう事…？どついう…?!」

〈…神の力に近いとも言われる羽根を手に入れたのだ。呪いの一つも解けよう〉

の…一つも解けよう

あまりに沢山の情報が降り掛かって、トルイは頭がどうにかしそつだ。

「呪い？俺、呪いが？この羽根、何っ？？」

〈・・・お前の連れて来た『贄にえ』の娘ではないか〉

〈・・・背中を合わせて『儀式』をしたではないか〉

〈・・・立派な羽根になった、よかったな〉

「え？ え？ ……えええ——!!」

トルイは血の気が引いた。

「待って待って！ 違つ！間違いだ！ イルを…元に戻して!!」

〈・・・なんと！ 折角羽根を得たというのに?〉

「違つ！ 違つて！ 俺、羽根なんか要らないから!!」

〈・・・〉

声達は黙った。

「『贄』とかじゃなくてえ！ 折れた羽根え！ 治す方法お！

教えて下さい!!」

この本題を聞くのに、何でこんなに遠回りになつちまつたん

だ？

「後、俺、羽根…要らないから、イルを元に戻して下さい」

余分な願いも増えてしまった。

〈・・・〉

声達は長らく黙っていた。だが自分達同士だけで、何やら申

し合わせている気配はする。

〈・・・では……〉

最初のしりフがやっと喋った。

〈・・・お前の母親をここへ連れて来るがいい、我等が羽根を接

いでやろう〉

〈・・・お前の羽根は、その時に元の娘に戻してやろう〉

「…今……戻してくれないの?」

トルイはゆっくり聞いた。

〈・・・今戻すと、再びこの神殿を訪れた時、入り口で難儀する。

羽根があれば、素直に入れる〉

〈・・・それに、呪いの解けた本来の姿を、母親に見せたかろう?〉

「……」

〈・・・その為には、お前はその羽根を『要らない』などと言っ

てはならない。『羽根は要る』と、声が出て言わねばならぬ〉

〈・・・さあ、言うのだ。言わねば現世に帰れまい〉

——「子供騙したあ、まさにこの事だぜ!」——

暗闇に良く通る声が響いた。

「誰?」

空中に炎が渦巻き、さっきの赤い狼が現れた。

「阿呆っどもが！ 帰れつつたろが!」

〈・・・獣…邪悪な獣!〉



〈・・・汚らしい！〉

〈・・・子供よ、お前の呪いの元凶だ、相手にするな〉

トルイは狼を見上げた。……呪い……。

「…………ふん、どーでもいいけどよお。そのどち匕にふたあつ
教えておく事がある」

闇から氷のナイフが現れ、侵入者を狙った。狼は飛んで来る
ナイフを避けながら、

「『要の』って言っちゃまうと羽根は二度と娘に戻れない！」
叫んでトルイの頭上を飛び越した。

〈・・・獣が！ でたらめを！〉

再び降って来るナイフを避けて、狼は反対方向に跳んだ。

「それと…、折れた羽根を治す術(すべ)はない！」

頭上からでも狼は、トルイの顔をしっかりと見て叫んだ。

〈・・・邪悪な獣が！〉

〈・・・獣が！〉

ナイフの数は増え、ひよいひよいと飛び回る赤い狼を執拗に
狙う。しかし狼は、ナイフを避けながら何かを待っているよう
だ。

像の一つが狼に向けて轟音を立てて倒れる。避けた所に間髪
入れず左右からナイフが現れた。

「おっと……！」

さすがに狼は少し躊躇してたたらを踏んだ。

——！！——

狼の目の前を、羽根の後ろ姿が覆った。トルイの剣が氷のナイフを叩き落とし、黙って巨大な像達に切っ先を向けた。

「……へっ……」

赤い狼は口の片側を上げた。

〈……子供よ、邪獣に味方するか?!〉

〈……気でも振れたか?!〉

トルイは剣を振り上げた。

「わんわんうるさいー！」

思い切りよく撃ちおろした剣から、強い光が弾け飛んで、シリーズ達をかき消した。辺りは再び闇と静寂に包まれた。

「ふうん……」

赤い狼がニヤニヤしながらトルイの前に降り立った。

「情けない魔法使いやがって。お前の母親の足下にも及ばんぞ」

「…先に、呼んでくれたの、あんただろっ?」

トルイは剣を鞘に収めながら、肩で息をしていた。

「お偉い有翼人サマより、なんで邪悪な獣を信用した? 赤毛

の皇子さん」

「あんたを信用した訳じゃない、ただ…」

「ただ?」

「自分をやたらでかく見せたがる奴は信用出来ない」

「誰が言った?」

「親父…」

狼は満面の笑みを浮かべた。

「さてと……」

赤い狼は踵を返した。

「教える事はさっきで終いだ。じゃあな」

「え?! 待って! もっと教えて、お願い…」

トルイは慌てて追いかけたが、振り向いた狼の表情は、超不機嫌だった。

「俺様に話しかけていい人間は、俺様と契約をした人間だけだ。

あと、俺様は『お願い』されるのが大っ嫌いだ! 覚えとけ!」

何だか地雷を踏んだみたいで、逆ギレされて牙をむかれた。

しかし去られたら困る。

「契約? 契約すりゃいいの? 教えてよ、イルを…」

次の瞬間、狼が一足飛びにトルイに迫り、剃刀みたいな牙を

喉に当てて来た。

「軽々しく契約なんて言うんじゃないねえ！ お前らガキが！」

しかし同時に、トルイの背後から手が伸び、彼の手に重なった。見覚えのある、艶色の細い指。

「あ……？」

狼の言葉が終わる前に、イルウの手が添えられたトルイの手は、剣を抜いて狼に向けていた。

「ほおほお」

狼は、少年から離れて後退りした。

「言え！ イルの戻し方！ 蒼の狼を救う方法！ 言え!!」

「なだめた、すかしたり、自分勝手だねえ。人間はこつでなくっちゃ」

狼は嬉しそうにトルイの方に跳び、剣の峯をボンと蹴って、くるりと回って離れた所へ降りた。

「有翼人の祖先もそうだった」

喜ばせてくれた「ご褒美なのか、急に語り出した。剣を向けられて喜ぶなんて、難しい奴……。」

「生まれた時から羽根がある訳じゃねえ。羽根は、肉体から離れた魂……この世を去った者の魂だ」

「え？ え？ イルが？」

「お前の背中にあるのは、あの娘の『お前を護りたい魂』だ。『ここにいる間はまだ』この世の者』だから、落ち着け」

トルイは動揺したい気持ちを抑えて、一生懸命聞く事に集中した。

「元々は、祖先が死後に、子や孫を護る為に羽根になった。ところがこの羽根、奪う事が出来る。欲をかけた奴が集め出した」……」

「羽根にあるのは護る心だけで、宿主を区別しない。資質のある者なら、誰の魂でも羽根にして持てた。本来ならやるべき事じゃない。しかし誰かがやりだすと、歯止めが効かなくなる。

連中、神に近付きたかったんだ。そして、…生け贄じみた事が行われた。人間を拐い、騙して、儀式を行い、羽根にする」

「いけ……にえ……」
「それに危機を感じた風の民の祖先が、神殿を封印し、野に下りたのさ」

狼はトルイと背中の中を羽根を交互にねめつけながら、小さく息を吐いた。

「残された怨念共は、羽根への執着だけで、この神殿を漂っている。『生きている羽根を持つ資質のある者』を、喉から手が出る程欲しかったろうな。羽根を集める土台として」

ど・土台……？ トルイは寒気がした。

「えっ？ じゃあ？ 蒼の狼は？ 儀式をしたのか？」

誰かと……？」

「俺様に質問すんな！」

赤い狼はまだ歯を剥いた。扱いの難しいオッサンだ。

「あいつは……、何も知らん。隔世遺伝で、たまたま羽根を持てる資質があった。で、たまたまあいつを激しく守護したい、死せる魂があった。まったくの偶然だ。多分、死せる魂の想いの強さが、様々な理屈を凌駕したんだ。ここで儀式をした訳じゃないから羽根は細くて弱かった。……それだけだ」

「……」

トルイは目を白黒させながら、一生懸命、今聞いた言葉を反芻している。

「もう、いいか？」

「あ、いや……そう！ 羽根が折れて死にかけてるのって、どうすればいいんだ？」

「折れちゃったら、ただ羽根だけ果てる、持ち主にダメージはない筈なんだが。宿主を道連れにするのは……」

未練があるんじゃないか？」

「羽根が？」

「羽根と、あと、宿主……お前の母親も、だ」

「……」

「後は自分で考えろ」

「イルは？」

「さっき、お前が『要らん』と言ったろ。あれで儀式は反古ほ」

「……」

『要らん』って言えば、その姿でおうちに帰れるぞ」

「……この髪、あんま、趣味じゃない。それに俺の青鹿毛、赤色の方が似合う！」

狼はかかかっと高笑いした。

「俺は行くぞ」

「契約してもいいから、もう一個だけ質問させてくれ」

「狼は、今度はキしず、ゆっくり振り向いた。」

「……なんだ？」

「何で、あなた、そんなに詳しいんだ？」

「……まあ、面白かったから……さ。この神殿に渦巻く亡霊共の欲望、怨念、それに群がる魔性共。最高の居心地だし……」

狼は言葉を切った。

「なに？」

「いや、お前、別の事、聞いて来ると思ったのに……」

「聞いても、あんた、まともに答えてくれそつじじゃないもん
少し沈黙の後、再びトルイが口を開いた。

「……で、契約って、俺、何をすればいいの？」

「俺と契約したらどうなるか知って言ったんじゃないのか？」

「知らない」

「俺様がエライ目に遭つたんだよ！ そんな奴の契約に乗ると！」

「……？？」

「お前みたいなどチビのガキの契約なんか要るか！ とつとつ

帰れ！」

「あのさあ……」

「帰れ！」

「あんた……『誰か』の為に、ここに来て、色々調べてくれているの？」

赤い狼はまたトルイの喉元に迫った。

「か・え・れ……!!」

トルイは怯まず赤い狼の顔を近くでじっと見つめ、小さな声
で何か囁いてから、一歩下がって、ヒュン！ と闇へ消えた。

赤い狼は闇に向かって牙を剥いて吠えた。

「俺様に『それ』を言つなああ——っつ!!!」

狼が闇を歩いていると、前方に立つ影があった。闇の中に
て、内からの光が辺りを温もらせる。

「あいつはもう帰ったぞ。お前も早く帰らんと、還り損ねるぞ」

「蒼の狼さんに……」

イルアルティは胸に手を当てて、赤い狼を真っ直ぐ見ている。

「看病していた時、聞いちゃったんです。イル、バカだから……」

「……」

「皇子様の髪の毛、何であんなに真っ赤っかなんですか？って」

狼は下を向いて、蒸せ返るよつに笑った。

「そりゃ、大馬鹿者だ！ 普通、聞かんぞ」

「そしたらね、……そう、そんな風に笑いながら……トルイには、

お父さんが二人いるのよ……って」

「……」

「血を分けてくれたお父さん、護りを授けてくれたお父さん」

「護り？ なんかの間違いだ」

狼は吐き捨てるように言ったが、小さな声だった。

「呪いじゃなくて、護りだって、……強い、狼の護り……」

「……」

「それだけ。じゃあね、狼さん」

「……へっ……」

二人は闇に溶けた。

神殿の広間で、少年と少女は目を覚ました。

辺りには、今しがたまで戦闘が繰り広げられていたような、魔物の残骸が散らばっていた。

二人は、無言で手を取り合って立ち上がり、外に向かって駆け出した。神殿の入り口から朝陽が差し込んでくる。あと半日しかない。いや、出来るだけ早く帰らなくちゃ！

しかし、魔性の残党があちこちから沸きだし、入り口を塞いだ。奴らは羽根に執着というよりも、そこから生まれる情念を糧に、ここに巢食うのだ。真正面には、巨大な黒虎が、青竜刀が五本並んだような爪を振りかざしている。

走りながらトルイは、今度は怯まず剣を掲げた。

その剣に、イルが石榴石の杖を重ねる。

二人、声を併せ、宣詞を唱えた。

力強い声が、長い廊下をこえました。

破邪の光は神殿の外まで延び、掻き消える魔物の残影をくぐって二人は雪原に駆け抜けた。

その瞬間、神殿はまたミキミキと氷に覆われ、外界と遮断される。大昔、ここを閉じた祖先の封印が、まだ効いているんだ……。

崖を滑り降りると、鬪牙の馬が駆け寄って来た。

「帰ろう！」

二人を乗せた馬は、一気に雪原を駆け降りて、グライダーのように飛び立った。

飛び去る馬影を眺めながら、神殿の屋根で伸びをする赤い背中があった。

「最後の魔法は、まあまあだな……」

山頂から二匹の龍がこの星を周回に飛び立つ。風の元元は、ヒトの営みなど、歯牙にもかけていない。

オタネ婆さんは幾度となく空を眺めていた。パオにはテムジと蒼の長が詰めている。

夕方までに二人の子供が帰らないと、医師の要請の鷹を放してから、蒼の長は風出流山に向かうつもりだった。里で二番目に早いオタネ婆さんのエンジの馬には、もう鞍を置いてある。

蒼の狼は静かに目を閉じていた。二人が危ない目にあっているのかもしれないが、成果など要らぬから無事帰ってくれと。

今回の事は、子供達に気の済むようにさせてあげたい……という、蒼の狼の願いだった。

だから、オタネ婆婆さんの歓声と共に帰還した子供達の、晴々と決意に満ちた表情は、一同を戸惑わせた。

二人は、尽力してくれた大人達に礼を言うのは後回しに……別の事を喋ると何かがこぼれてしまう……べらいの勢いで、蒼の狼の枕元に急いだ。両側に座り込み、両方から手を握る。

「……っ。」

蒼の狼は不思議そうに微笑みながら、二人を交互に眺めた。イルアルティがまず口を開いた。

「その羽根は、…イルの、お母さん、です！」

一同が揺れた。蒼の狼は目を見開いた。

「アル・カンシラっ。」

二人はこくりと頷いた。

「ずうっと蒼の狼さんを護っていたの。そしてこの間は、イルの命も護ってくれたんです」

「アルが…っ？」

蒼の狼は驚きの眼差しで、少女の、母親と同じ青みがあった黒い瞳を見つめた。

やがて瞼を閉じると、睫毛からずうっと滴がこぼれた。

「そう、アルが……」

トルイが話を継ぐ。

「力を使い果たして折れた羽根は、そのまま天に召されるはずなのに、この羽根は引き留められている」

「……っ？」

「…かあさん」……」

少年は母親の手を強く握った。

「どっという事っ。」

テムジンが口を挟んだ。蒼の長がテムジンの腕に触れ、まず子供達の話聞きましよう……と、促した。

「かあさんが、この羽根に未練があるの。アル・カンシラに対して、何かやり残しているんだ」

「分からないわ？ イルを、幸せにするって事？」

「イルは、もう、とっくに幸せです」

「……………」

蒼の狼は目を閉じて考えた。アルのすべては 自分が墓まで持って行く事だと思っていた。

ならばこのまま墓へ直行しろ、という事なのだろうか？ それで、アルは喜んで迎えてくれるのだろうか？

「か・あ・さ・ん……」

トルイに呼ばれ、狼は目を開けた。

「そうやって、いつも独りで考え込んで、何も話してくれないから」

「……ごめんなさい」

みんな困ってしまった。

何となく、不自然さは感じてはいたのだ。テムジンも、蒼の長も、アルに関しては納得していない所がある。でも、イルが元気で健やかにいてくれれば、今はそれでいい……と思っていた。

「じゃあ、俺が聞くから、それに答えてくれろっ」

「？ ええ……」

トルイは一拍置いて、両手で母の手を包み直しながら聞いた。

「アル・カンシラはどうして死んだの？」

「……え……」

「トルイー！」

テムジンが咎めるが、トルイは譲らない。

「みんなそういうので、ちょっとづつモヤモヤしているから、」

「この羽根は逝けないんだ」

イルは黙って手を握っている。

蒼の狼は、小さな声で辛そうに言った。

「アルは……虎の毒の爪にかかったの」

「どうしてそんな事になったの？」

「トルイ……」

テムジンが再び咎めるが、さっきより力がない。

「そう……そうね、……ワタシのせいなの。アルの護衛だったのに、独りで空へ逃げてしまった……」

一回硬直し、今それをほじくならなくても……という顔をした。

「トルイ……蒼の狼はその頃まだ未熟だったんだ。戦にも連れて行けない位」

テムジンがフォローするが、事実は変わらない。

これでいいのだろうか……？ この自分の罪はずっと心に刺さっていた。これを懺悔しなかったのだろうか？

しかしトルイだけは揺るぎない口調で質問を続ける。

「それって、どうして？」

「……どうして……」

「かあさんが敵の中に親友を置いて逃げたっていつの？ あり得ないでしょ、そんな事！」

テムジンも蒼の長も固唾を飲んだ。彼等はそこから先に踏み込んだ事がないのだ。

「そんな事になる理由、一つだけ考えられるの。アル・カンシラは、敵方の人だったんじゃないの?！」

一同、啞然とした。

「何を、馬鹿な……!」

テムジンと長は同時に声を上げたが、…蒼の狼の凍りついた表情を見て、止まった。

「だったらすべて説明がつくんだ。かあさんが、護衛すべき人を守れなかった事。親友な筈の人のこと、殆ど語らない事……」

しんとした。

テムジンも蒼の長も、何も言えなかった。アルが本当に突然姿をくらましてしまい、蒼の里でかたくなに口を閉ざしていたのも、それで納得出来るのだ。

蒼の狼は、自分の片手を握って離さないイルを見やった。少女は意外と落ち着いていた。帰りの馬上で、既に二人でその結論に達していたのだろう。

「小狼シャオラ……!」

テムジンは思わず遠い日の呼び名を口にした。

「そつなの……?」

蒼の狼は一瞬子供のように心細い顔をしてから、頷いた。

そして、目を閉じて、静かに話し始めた。

「…アル・カンシラは、純粹な人。誰かが戦で血を流すの止めたいとだけ考えていた。でも、信頼すべき人を、間違えてしまったの……!」

イルの余った方の手に、トルイの手が延びる。二人は暗い海の漂流者のように、強く手を握った。

蒼の長がイルの側に立つ。見上げるイルを見て、優しく頷く。

テムジンもトルイの横に並んで膝まづき、大切な人の長年の痛みを、共に受け止めた。

「オタネ婆さん!」

トルイが背中越しに出口に向かう老婆を呼び止める。

「ここにいてよ! 俺達、婆さんの孫だと思っているから!」

一同静かに話を聞き、遠い女性(ヒト)を思いやった。

テムジンの一筋の涙を見て、蒼の狼は突然、自分がアルカンシラにやり残した事が何であったか、悟った。

だから話の最後の言葉は、声に出さずに締めくくった。

「アル……でも、みんな、貴方を許すわ。そして、ありのままの貴方を受け入れる!」

アルは…、テムジンにも、美化された自分ではなく、本当の寂しい自分を知って…そして…許して貰いたかったんだ……。

一夜明けたら、羽根は少しの痕を残して、ひとりでに離れた。無理に切り離したらどうなっていたか…。大人達は肝を冷やした。

羽根はパオの奥の森に埋められ、イルアルティが花を植えた。カタカゴの花を……。

蒼の長は溜まった用事にうんざりしながら、慌ただしく帰って行った。途中でイルが隠した、たてがみの中のラブレターを見つけて、またジーンとするんだろう。

オタネ婆さんは、蒼の狼が全快するまで鎮守の森に留まる事になった。ついでにトルイの指導教官も買って出て、張り切っている。

テムジンは、再びの大陸遠征の準備にかかっている。『世界制服』はライフワークだから止むことはない。

世界を統一国家にし、戦いぐさを無くする事が、彼の母親や、兄弟や、アル・カンシラや、たくさんの不幸を防ぐ事に繋がる…という信念は、多分、一生揺るがない。

そんなテムジンの寿命が終わるその日まで、多分、蒼の狼は側にいる。

蒼の狼は、テムジンに頼んで、二人きりで草の馬に乗り、空の真ん中で最後の懺悔をした。

「ワタシ…多分、アルにちよっぴり嫉妬していたの。素直に貴方の心にどんどん入って行くアルに…」

テムジンは、ふうん…と、とほけた顔をして、

「俺の心って、君が思っているより、ずっとスペース広いから。誰が入って来たって、君の場所は揺るぎないのに」

と言って、え?! と聞き返す間もなく、草の馬を急降下させた。

トルイは、兜を被ることがなくなった。

赤い髪をなびかせて城内を闊歩していると、意外と若い兵士のシンバが着いた。同年代の友人が出来、遅まきながらの反抗期で、蒼の狼を困らせ、テムジンを楽しませている。

それから王妃(ヴォルテ)の書庫に出入りし、本を借りてはぎこちなく会話したりしている。

次の遠征は同道するかとテムジンに尋ねられた夜、久しぶりに蒼の狼の所へ行き、改まった願いをした。

戦場に出る前に、一度、蒼の長の元で学ぶ機会が欲しい、と。

「人間だけでなく、妖精や、魔物や、風や大地や水や、色々な繋がりを知って、統べる人になりたい」

そう言うトルイに、蒼の狼は頷いたが、少し寂しそうだった。

「どうしたの？ なにか障りがある？ 言ってくれないと、俺…分らないから」

「うん、そうじゃなくて。人間の子供、成長するの…本当にあつと言っただって思っただって。ワタシ、どんどん置いて行かれるね…」

目尻を拭いながら呟く母を見て、自分の背がこのヒトに追いついているのに気付く。

蒼の妖精は人より遙か長く生きる。人から見ると時間が止まったようだ。いつか自分も、このヒトを追い抜いて行くのだろう。

イルアルティは……………草原へ帰った……………。

不思議な事に、風の魔法や能力を一切使えなくなった。蒼の妖精や草の馬が見えて、ちょっと馬に乗るのが上手いだけの、平凡な女の子になってしまった。

「思い込み』だったんじゃない」

不思議がるトルイに、オタネ婆さんが説明する。

「自分が『あの蒼い髪の草の馬のヒトの子供』と思っただけで、見よう見真似な風を使う能力が生まれたのじゃ」

「まさか…」

「蒼の長の子供…と信じ込んでからは、『同じ長の家系の血を持つトルイ』と同じ事が出来て当然…と思っただけで、急激に能力が上がったんじゃない。面白かったぞ、教えが良かった」

「思い込みで魔法が使えるって？ そんな事って有り得るの?!」
「普通は有り得ん」

オタネ婆さんは、石榴石の杖を撫でながら言った。

「じゃが、あの子なら有り得る。思い込みだけで魔法が使えてしまう、何でも出来てしまう。何か納得しちまわないかい？」

トルイは、一度溶けて再び固まったように傷もない、綺麗な石榴石を見つめながら、大真面目に頷いた。

婆さんは、次の句を飲み込む。父親が人間…と分かっただけで能力が消えちまうのも『思い込み』の一種なんだがね。どちらが本当のあの子なのやら……………？

イルは魔法が使えなくなっても、あまりがっかりしていない。逆に、何であんな事が出来たんだろう…と、風出流山の出来事を夢のように思っていた。

相変わらず、風や大地の声を聞きながら馬で走るのは楽しいし、自分はまだ変わっていないって思う。

ああ、家族は増えた。お父さんやお婆さんが一気に増えたのも嬉しいけれど、一生末っ子だと思っていたイルに、弟が出来



たのが一番嬉しかった。実はほっぺパチンを弟にやるのも夢のひとつだったのだ。

晩春の夕方： イルは空色の乗馬スポンを履いて、大好きな楡の木の下にいた。

軽いななきがして振り向くと、懐かしい闘牙の馬と・・・

「お待たせしましたか？」

「いえ」

蒼の長は、イルが草原に帰るって言った時、一番嬉しそうだった。そして母の墓参りに行きたいと言っイルの願いを聞いてくれた。その帰りに、雲の上の天の川を見せてくれる約束もしてくれた。

金銀砂子の星々の中に、大きな羽根を広げた白鳥がいるという……。

〜おしま〜

二〇〇九・七・二七

